

温かいご支援、ありがとうございます

AAR Japan [難民を助ける会]
フィリピン台風被災者緊急支援の半年報告



■幼少時に患ったポリオの影響で足に障がいのあるロマン・サピケーニャさん（中央）に、東京事務局の山本祐一郎（左から2人目）が緊急支援の食料を届けました（2014年1月15日、パロ町）

2013年11月8日にフィリピンを襲った台風ハイエン(現地名ヨランダ)の被災者支援に対し、皆さまより多大なるご協力をいただき、心より厚く御礼申し上げます。当会は2013年11月14日より、緊急支援チームを現地に派遣し、「食料配付」「家屋補修資材提供」「障がい者の戸別調査と行政への働きかけ」「教育再開支援」の4つの活動を行ってまいりました。これまでの半年間の活動をご報告いたします。

被災直後にはセブ島北部、レイテ島タクロバン市、パロ町で、緊急に必要な食料と家屋の支援を実施しました。また、障がい者が支援から取り残されないよう、どこにどのような障がいのある方がいるかなどの情報を収集・整理し、個人情報保護に配慮した上で行政や他支援機関に共有しました。そして、6月からの新学期に間に合うよう学校再開支援を行ってきました。

被災後半年、様々な団体が支援活動をしている中、AAR だけからできること、AAR にしかできないことを考え、支援の届きにくい方々や地域を対象に、活動を継続してきました。今、少しずつ復興の兆しが見えてきています。しかし、一生懸命働いて1日の収入が約700円と食べるだけで精一杯という世帯が多い中、多くの家族が家を十分に修繕できずにいます。また、車いすや杖を失い外出できなくなった人も多くいます。

家屋補修資材を1世帯でも多く届けるために、1人でも多くの方が自分の体に合った補助具で再び元気に生活できるように、そして、1人でも多くの方が笑顔で暮らせるように、AAR は今後も活動を続けてまいります。改めて皆さまのご支援に心より御礼申し上げるとともに、引き続きのご協力を何卒お願いいたします。

AAR Japan [難民を助ける会]
堀江 良彰

被災地の概要と台風被害状況

フィリピン共和国は、日本からおよそ 3,000 km 南に位置し、大小 7,017 個の島々からなる島国です。南国特有の温暖な気候のため、特にセブ島のセブ市周辺には、毎年日本から多くの観光客が訪れています。近年では、首都マニラを中心に工業化が著しく、フィリピンにビジネスチャンスを見出す日本人も多くいます。一方、工業化の影で拡大する貧富の差が大きな社会問題にもなっています。また、地方では漁業や林業、農業を中心とする昔からの生活が根付いています。



フィリピンは「台風銀座」と呼ばれ、毎年約 20 個の台風が通過します。

2013 年 11 月 7 日頃、太平洋で発生した巨大台風ハイエン（現地名ヨランダ）は、8 日フィリピンに上陸し、レイテ島やサマル島を中心に甚大な被害をもたらしました。最低気圧 895 ヘクトパスカル、中心付近の風速 60 メートル/秒、最大瞬間風速 90 メートル/秒の史上最大の台風でした。4 月 17 日現在、死者数 6,300 人、行方不明者数 1,061 人、避難者数 890,895 人に達しています。

今回の台風では、猛烈な風雨に加えて、前例のない高潮と洪水によって、その被害が拡大したと言われています。強烈な台風の勢力により、海岸線沿いの家々は壊滅的な被害を受けました。特に被害の大きかったタクロバン市では、全壊戸数 12,270 戸、半壊戸数 46,553 戸に上り、台風によって家を失った人が数多くいます。

加えて、庁舎、幼稚園や学校、商業施設など公共施設の多くも損害を受け、被災後しばらくは、行政機能や公共サービスが機能しなくなりました。



■ 台風で屋根が飛ばされ、壁が崩れかけている家が、被災後いたるところで見かけられました (2013年12月14日、セブ島北部)



■ 高潮・津波に襲われたタクロバン市。建物の多くが流された海岸線の様子は、東日本大震災を思い起こさせます (2013年12月22日、タクロバン市)

AAR の支援と現地の人々の声

AAR は被災直後から、支援の手が届きにくい障がい者や山間部の被災者を中心に、支援を継続しています。被害が特に甚大だったレイテ島タクロバン市とパロ町に加え、離島を含むセブ島北部で実施した4つの活動をご報告します。

食料支援

フィリピンは貧富の差が大きく、特に障がい者のいる世帯は、その80%が貧困とされています。そこで、AAR は障がい者のいる3,393世帯（約17,000人）に食料を届けました。配付場所まで物資を取りに来ることのできない世帯には、スタッフが直接届けに行きました。

6人の子どもの持つマリア・パーニョさんは、幼少期に患ったポリオのために身体に障がいがあります。「支援はとてもありがたいです。台風で夫を亡くしました。助けに来てくれたあなたは家族のようなものです」と話してくれました。



■家族を代表し、集会所でうれしそうに食料を受け取る男子（左）。右は駐在員の船越雄太（2014年1月24日、タクロバン市）

家屋補修資材の提供



■離島に住む障がい者のいる世帯に家屋修繕資材を届けました（2014年2月20日、ボティゲス島）

被災者の多くは吹き飛ばされた屋根部分をビニールシートで覆うなどして対応したり、全壊した家の周辺でテント生活を強いられていました。フィリピンの家屋の多くは、トタン、合板、ヤシの柱材などで建設されています。造りも貧弱で、台風の影響で全壊した家が多かったのもこのためです。

AAR は、2013年12月中旬からトタンや釘など家屋補修用の資材をセットにし、合計1,796世帯（約9,000人）に届けました。

またフィリピンでは、家の建築や修繕を十分な訓練を受けていない大工が行うことが多いです。そこで当会は、大工を対象に災害に強い家の建築方法を伝える講習会を行いました。山間部の2つの村から総勢40人の大工が参加しました。また、大工を雇えない一般住民が家屋の修繕に取り組むこともあるので、今後参加した大工が無料で周辺住民へ技術を伝えていく予定です。



■講習会で地元大工たちが災害に強い家を作る方法を学びました。講習会の参加者の1人は、「これまで家屋関連の支援はなかった。すごく助かっている」と語っていました（2014年4月30日、タクロバン市）

障がい者の戸別調査と現地行政への働きかけ

障がいのある方々は、集会所など支援物資の配付場所まで出向くことが難しいため、緊急物資を受け取れない場合が多いのが現状です。障がい者の支援を受ける権利を保護し、確実に支援を届けるため、どこにどのような障がい者が住んでいるかを把握する必要がありました。

そこで、障がい当事者団体や役場で得た情報を基に、障がい者宅を1軒1軒訪問。個人情報保護に配慮した上で、合計5,687人の情報をデータベース化し、それを市町村に提供しました。今後は、障がい者の世帯が漏れることなく支援が届くようになることが期待されます。



■精神障がいのあるレネーさん(左から3人目)を東京事務局の山本(中央)が調査のため訪問。台風後強いストレスを感じ、栄養失調にも悩んでいました(2014年1月15日、タクロバン市)

教育再開支援

レイテ島タクロバン市とパロ町にある特別支援学校(5校)を対象に、教科書やAV機器、および机・椅子などを届けました。提供した教材は、知的障がいのある子どもが学習しやすいものを教員と共に選定しました。加えて2つの学校では台風で壊れたり浸水したりした校舎の修繕を行いました。

支援先の1つであるタクロバン市のサントニーニョ特別教育センターのソニア・パラナス先生は、「台風で校舎の屋根が吹き飛んだため、教室は泥やごみにまみれ、教材やパソコンなども使い物にならなくなりました。自分の家も被災しましたが、まず学校の清掃を優先しました。夏休み明けの6月に新しい設備で学ぶ子どもたちを見るのが楽しみです」と語っています。



■大工たちは、1日も早く修繕を完了させるため学校に泊まり込んで作業しています(2014年4月25日、パロ町)

今後の支援

今回の台風で家屋を失いテントで生活をしている方々、拾ってきたトタンや合板でなんとか風雨をしのいでいる方々、遅々として進まない復興計画のために災害リスクの高い地域から安全な場所に移住しようにもできない方々など、「家」に関連した課題が大変深刻です。フィリピンでは6月から台風シーズンを迎えるため、家屋の修繕が急務です。当会は引き続き家屋補修資材の提供と、現地で災害に強い建築方法が根付くよう、大工を対象にした講習会を継続します。

また、台風で車いすなど歩行補助具を失った人々が多くいることが、戸別調査により明らかになりました。今後は、車いすを必要としている方々の心身機能や生活環境などを確認し、個々人に合わせた車いすを提供する予定です。

■「台風で車いすをなくして、ベッドに横になる時間が長くなった」と語るアランディアさん(左)。理学療法士でもある東京事務局の大室和也(右)が車いす提供に向けて体の状態を調べている様子(2014年4月21日、タクロバン市)



フィリピン台風緊急支援のこれまでの収支状況 (2014年4月30日現在)

収入 81,581,206円 支出 45,504,093円

※収支には寄付金と助成金が含まれています。